

## 「ブロークン」 ★★★

2008（平成20）年11月5日鑑賞＜G  
AGA試写室＞

監督・脚本・プロデューサー：ショーン・エリス  
ジーナ・マクヴェイ（X線技師）／レナ・ヘディ  
ステファン・カンバース（ジーナの恋人）／メルヴィル・ブポー  
ジョン・マクヴェイ（ジーナの父）／リチャード・ジェンキンス  
ケイト・コールマン（ダニエルの恋人）／ミシェル・ダンカン  
ダニエル・マクヴェイ（ジーナの弟）／アシエル・ニューマン  
2008年・イギリス、フランス映画・88分  
配給／リベロ

### ＜長編2作目も不思議な雰囲気＞

『ブロークン』は、『フローズン・タイム』（06年）で長編映画監督デビューを果たした、1970年生まれのイギリスのショーン・エリス監督の長編2作目。『フローズン・タイム』について私は、「ちょっと不思議な感覚で過ごす1時間42分が気に入るかどうかは、あなたのお好み次第」と書いた（『シネマルーム18』155頁参照）。

しかして、「鏡が割れると7年間不幸が続く」という迷信を口にするシーンから始まる2作目の『ブロークン』も、1作目と同じような不思議な雰囲気映画。そのうえ、『CASHBACK』を原題とした『フローズン・タイム』は、恋人と別れて不眠症に陥った美大生の主人公が求める美をテーマとした芸術作品(?)だったが、『ブロークン』は、鏡を重要な小道具とした恐ろしいドラマ。

### ＜あなたは「シンメトリー」って英単語を知ってる？＞

映画は娯楽であると同時に勉強のための重要な素材。08年11月4日の「映画から学ぶコンプライアンス」というタイトルの東京での講演で私は熱くそう語ったが、この映画のプレスシートにある「シンメトリー・サスペンス」という言葉を見るとまさにそれ。だって、あなたはサスペンスという単語は当然知っているだろうが、シンメトリーという単語を知ってる？

中高一貫教育の受験校から阪大法学部に入學した私の英語力ではそれを知らなかったのだが、多くの人はこんな英単語を知らないのでは？もっとも、私の事務所で事務職員に「シンメトリーって知ってる？」と聞くと2人は知っていると言ったから、私の前提は大きく誤っているのかもしれないが、とにかく私がシンメトリーという単語を知らなかったことは事実。

### ＜映画のテーマは、左右対称＞

私はこの映画を観ることによって、はじめてシンメトリーとは「左右対称であること」だと学ぶことができた。なるほどこの映画は、主人公ジーナを演ずるレナ・ヘディの整った顔が見事に左右対称の美しさを誇っていることだけではなく、鏡越しに映し出される人間の左右対称性がテーマ。といっても、一体何のこと・・・？

去る11月3日に観た『アイズ／THE EYE』（08年）では、ジェシカ・アルバ演ずる主人公の鏡越しに映る顔が角膜移植をしたドナーの女性の顔になるところがミソだったが、『ブロークン』では鏡越しに映るレナ・ヘディの顔は同一人物・・・？この映画はそんなシンメトリー・サスペンスだから、映画全体が不思議な雰囲気になるのは当然。しかし困ったことに、どうも私はこの手の映画は苦手・・・。

### ＜なぜ、この家族が？＞

映画冒頭は、ジーナの父親（リチャード・ジェンキンス）の誕生パーティーのシーン。父親の家に集合したのは、X線技師のジーナとその恋人のステファン（メルヴィル・ブポー）、そして弟のダニエル（アシエル・ニューマン）とその恋人のケイト（ミシェル・ダンカン）の合計5人。

ところが、乾杯の声をあげたとたんに、突然大きな鏡が割れて粉々に。こりゃ、一体ナニ？5人は「鏡が割れると7年間不幸が続く」という迷信を口にしながら笑い出したが、これがこの家族を襲った不幸の始まり。しかし、一体なぜ、この家族にそんな不幸が・・・？

### ＜もう1人の自分が・・・＞

この映画のテーマはシンメトリー、すなわち左右対称だが、それをもう少し具体的に言うと、「もう1人の自分がある」というのがこの映画のミソ。すなわち、誕生パーティーの翌日、ジーナが職場からの帰り道、自分と同じ赤いチェロキーを運転する自分と瓜二つの女性とすれ違ったところから、奇妙な物語がスタートする。ジーナがその後をつけて彼女のアパートの中に侵入すると、そこは自分が住んでいる部屋と全く同じ。そんなバカな。もう1人の自分があるなんて！

ショーン・エリス監督は美しいジーナの顔の左右対称性だけではなく、①なぜかジーナが車の事故にあう時に乗っていた車のナンバーが左右対称に似た並びとなっていたり、②レントゲン技師のジーナが、なぜか内蔵逆位という珍しい症例を診断していたり、とあちこちにショーン・エリス監督流の左右対称をテーマとした映画らしい「仕掛け」を施している。しかし、私に言わせれば、こりゃ凝りすぎかつあまりにも難解では・・・？

### ＜死がこんなに身近にあるとは・・・＞

映画冒頭の家族そろっての幸せな誕生パーティーの姿を見ていると、なぜジーナたちの家族がこんな不幸に見舞われるのか全くわからない。またセリフを極端に省略し、不気味な音楽が流れる中で、ジーナが遭遇する交通事故をはじめとしてスクリーン上で次々と展開されていく不幸は、いつの頃からか死の影を伴ったものになっていくから恐ろしい。

ちなみに、この映画には冒頭、エドガー・アラン・ポーの「お前は勝つたのだ 私は降参する だがこれより先は お前も死んだ この世に対し天国に対し 希望に対し死んだのだ 私の中にお前は生きていた 私の死でお前がいかに 自分を殺したかを見る お前自身のものである この姿で見るがいい」という短い文章が表示されるが、この文章自体がすごく不気味。死がこんなに身近にあるとは・・・。この映画を観ると誰もが、そんな実感を持たざるをえないのでは・・・？

2008（平成20）年11月6日記